INTERVIEW：インタビュー

作曲家・JASRAC 会長

都倉俊一さん

1970 年代以降「ジョニィへの伝言」「どうにもとまらない」「あずさ 2 号」，一世を風靡したピンク・レディーの「UFO」をはじめとする数々のヒット曲。今でもカラオケで振付を思い出しながら歌ったり，ふと口ずさんでいる方も多いのではないだろうか。今月号のインタビューでは，作曲家の都倉俊一さんにお話をうかがった。また，現在，一般社団法人日本音楽著作権協会（JASRAC）会長として，精力的に取り組まれている活動についてもお聞きした。

（聞き手・構成：中島美砂子）

――これまで数多くの作曲を手掛けられ，ピンク・レディーをはじめ，多くの歌手を育てていらっしゃいます。作曲家というお仕事，あるいは，プロデューサーともいうべきお仕事をどのようにお考えですか。

作曲と歌手を育てることは同列のように思います。作曲家としては，自分の気が向くままに曲を作る，その曲を他人に歌ってもらう。つまり，第三者を介して自分の作品を発表するわけです。自分の作品を歌ってくれる人を探す，才能を発掘して育てていくというのは，プロデューサーのような仕事なのでしょうね。

また，作曲とともに，編曲もやりますが，やはり，メロディーは音楽の主役ですね。12個しかない音を駆使していくことはエンドレス。どんなにリズムが良くても，メロディーがない作曲家は残らないでしょう。

――メロディーは大切ですね。

もともと，日本の歌は，詞があって曲を付けていたのです。昔は「詩人」が作っていた詩，つまり，文学を節（メロディー）にのせて，情緒あるものにしていたのですね。メロディーは補助的なものだったのです。ですから，今でも「作詞・作曲」といいます。このような言い方は日本だけで，諸外国では逆なのですよ。でも，私は，音楽家ですが，言葉の大切さを強く意識しています。歌を聞く人々には，メロディーに乗りながら言葉にひたってほしい。そのためには，正しくて，表現力が豊かな言葉が必要なのです。

――阿久悠さんとのコンビで，ピンク・レディーの「UFO」など，多くのヒット曲を生み出されました。

阿久さんとのコンビでは，作曲が先で，後から詞を付けました。言葉の後付けは，まさに職人芸でしたね。阿久さんによって，歌謡曲は社会を映す鏡になったといえるでしょう。「UFO」の場合は，ま

ず先にタイトルをもらったのですが，その時，「ユーエフオー」とするのか,「ユッフォ」と発音するか，皆で議論しました。私は後者の方が響きがいいと感じました。

私は，理屈を考えては新しいものは生まれないと思っています。イノベーションは遊び，遊んだ者が勝ちですね。今まで多くのレコード会社の会議に出てきましたが，会議ではめったに斬新なアイデアは出ません。音楽は会議で作るのではありません。

―― 曲作りで苦労されたことはありますか。

70年代では，常時30名ほどのアーティストの面倒を見ていました。当時，1人のアーティストのために3か月に1度は新曲を作らなければなりませんでしたし，その他にも，LPレコードやCM，ドラマの音楽も作っていました。徹夜で何千曲も書いてきましたね。1日5曲作ったこともあります。ところが，80年代になると，自分が音楽を作る機械みたいに思えて，自分が摩耗するのではないかと恐怖感を覚え始め，気分一新ロサンゼルスに生活の拠点を移したこともあります。

―― 最初に音楽に触れられたのは，4歳のころ，バイオリンを習われました。

バイオリンは母の気まぐれですね。私は最初に触れる楽器はピアノが良いと思いますよ。どんなことでも同じでしょうが，不断の努力をして，非常に苦しい状態が続くうちに，ある時，ふっと快感を覚える。特に楽器を習得する場合，その時の心地よさとの巡り合いが非常に大切なのです。

―― 最近，口ずさめる歌謡曲が少なくなったという声を聞きます。

音楽は楽しくあってほしい。しかし，最近の音楽の中にはコンピューターのプログラマーが音を繋げただけのつまらないものも多くなってしまったように思います。コンピューター用ソフトがすべてを作ってしまう。こうした手法は音楽にとって破壊行為です。もっと広い視点から考えると，ワープロばかりに頼ってしまうと字を書けなくなるのと同じで，コンピューターに依存して人間の動物的な本能が摩耗あるいは萎縮しつつある。そのような現代において，いつ人間が本来の姿に回帰するのだろうかと思うことがあります。また，コンピューター・グラフィックスに慣れてしまって，人間の汗や涙を感じない若者が増えつつあると言われます。どんなに素晴らしい最新のデジタル技術で作った音も，バイオリン奏者50名による生演奏には到底かないません。

―― 2010年8月に日本音楽著作権協会（JASRAC）の会長に就任されました。いわゆる違法コピーの問題など難しい課題に取り組まれていらっしゃいます。

現代社会において，デジタル技術はなくてはならないものになっています。しかし，一方で，著作物の違法コピーが容易かつ大量に可能となり，深刻な問題を引き起こしています。特に，若者は「違法」とは思っておらず，罪悪感がないのです。私たちは，私的録音録画のもとになっている機器に対して広く課金していくべきであるという私的録音録画補償金制度の必要性と充実を主張していますが，そのような考え方に対しては，著作権規制が強すぎるという意見があります。しかし，著作権をしっかり保護し

不断の努力をして，非常に苦しい状態が続くうちに，ある時，ふっと快感を覚える。特に楽器を習得する場合，その時の心地よさとの巡り合いが非常に大切なのです。

都倉 俊一

ないと文化は死んでしまいます。つまり，著作権を保護しないと，芸術で飯を食う人がいなくなる，自由に才能を伸ばすことができない，豊かな文化が生まれないということになるのです。JASRACの活動を通じて社会に「著作権」という意識を根づかせていきたいと思っています。

また，デジタル技術は日々進歩していきます。そのスピードには実に目まぐるしいものがあります。そうすると，技術規制のいたちごっこになって，とどまるところを知らないでしょう。そのような状況のもとで，社会がどのように技術を利用していくかという問題は非常に重要ですし，新しく発生する法的問題への対応，権利の概念の見直しも必要になるでしょう。

―― 私たち弁護士も新たな法的問題に積極的に取り組んでいく必要があります。

どのような理屈で著作権を保護していくか，著作権者が自分の権利を守るために相談できるようにするにはどうすればよいか，を考えてほしいと思います。また，若いクリエーターたちの著作権を保護することにも目を向けてほしい。若者たちが気軽に相談できる場所が少ないと感じています。

―― JASRACでは，こうした著作権保護に関する活動とともに，東日本大震災復興支援のために積極的に取り組まれています。

JASRACでは，著作権管理事業者として相応しい支援活動は何かを考え，「こころ音（ね）プロジェクト」を始めました。これは，被災地からの復興と音楽文化の振興のために，著作権者から申し出があった作品について，著作物使用料を拠出していただくというものです。私が作曲した，ピンク・レディーの「ペッパー警部」と「サウスポー」を皆さんがカラオケで歌うと，その著作物使用料が震災の復興に充てられます。是非カラオケで歌ってください。

―― はい，歌わせていただきます。お忙しいところ，ありがとうございました。

プロフィール　とくら・しゅんいち

4歳よりバイオリンを始め，小学校，高等学校を過ごしたドイツに於いて基本的な音楽教育を受ける。のち，独学で作曲法を学び，学習院大学在学中に作曲家としてデビュー。その後，アメリカ・イギリスで作曲法，指揮法，映像音楽を学び，海外各国で音楽活動を行う。JASRAC会長のほか，文化審議会委員，日本作曲家協会常務理事，全日本音楽著作家協会理事，日本作編曲家協会理事，日本音楽著作家連合相談役も務める。主な作品に，ピンク・レディー「UFO」，狩人「あずさ２号」，ペドロ&カプリシャス「ジョニィへの伝言」，山本リンダ「どうにもとまらない」など。